

## 青木猛比古先生建碑顛末

山田 平之丞

前掲「青木猛比古先生」の原文は現佐伯小学校長下川勝三郎氏（当時下堅田小学校長）の物せられたもので（勤王家青木猛比古先生）と題し昭和六年秋佐伯新聞紙上に連載されたものである。下川氏の『勤王家青木猛比古先生』を江湖に発表した動機は此の草にうもれてしまつてゐる志士の事蹟を顕彰し、其の碑を建設し、一は先生の靈を慰し、他は以て世道人心に聊碑益するところあらんしめんとするためであつて、同氏は原文の終りに、左記の通りのべてゐる。

「郷土の男女少青年諸彦、諸君は今の世に於て唯一純情の所有者であります。今若し諸君の名に於て、此偉大なる併し薄幸なる草莽志士の勤王碑が建設されるならば一は以て精忠の天聰に達する機運を速かなしめる事ともなり、先生の魂魄を安からしむるとともに、一は以て頽廢せる世道人心を鼓舞するところが尠くないと信ずるものであります。

永々と先生を紹介しましたが、最後に諸君の純情に訴へて建碑の儀を提唱する所以であります。摺筆に臨み九大教授文学博士長寿吉、宇佐中学校教諭小野精市、日田、武石繁次、保足達雄、淡窓図書館司書草野富吉の諸氏が南北地相隔つること遠きに拘らず、懇切に情熱的に御援助下さつたことを感激を以て御礼申上ます。又佐藤蔵太郎、関実一、疋田泉、野々下藤太郎、野々下道太郎氏未亡人の諸氏が貴重なる資料を提供して下さいました事を厚く感謝いたします。」

下川氏は上記の趣旨を以て郡内小中学校児童生徒及び男女青年団より零碎の寄附を集めて、青木先生建碑のプランを定め、自ら発起となり、郡内各方面に宣伝し、建碑資金募集に着手した。しかるにかゝる事業は一個人独自の発起となさず、教育会など公共団体の周施となすが、より有意義ではあるまいかとの議が起り、改めて南海部郡教育会直営の事業となし、下川氏を

委員長として、これが実現をはかった。醸金約四百円建碑石は堅田川清流に横つてゐた自然石、(下堅田青年団の労力奉仕でこれを搬出す)、碑面の文字は九州帝国大学教授文学博士長寿吉氏(長三州三男)の揮毫になる『青木猛比古之碑』は建てられた。

かくして其の除幕式が昭和七年七月十六日午後二時南海部郡教育会主催の下で、南海部郡下堅田村大字柏江遠川神社境内で挙行された。郡内各学校長、町村長、各種団体代表者等二百餘名出席。先づ板井教育会長の挙式の辞、齋主疋田泉氏の修祓があつて、司会者板井氏の手にて除幕、降神の行事疋田齋主の祝詞について下堅田小学校児童の「青木先生を偶ぶ歌」合唱、それより齋主、祭主、遺族、参列員代表等の玉串奉尊拝礼あつて、板井祭主の式辞、出納教育会幹事の工事報告、小野、平岡両県会議員、和田警察署長、高司町村長総代、阿南青年団長外数氏の祝詞があり、疋田下堅田村長の挨拶があつて閉式、江国寺本堂に於て引続き宴会を催し、餘興に柏江女青諸嬢の名物堅田踊あり。郷土史壇の雄、佐藤蔵太郎翁の佐伯史談などありて、盛会裡に午後五時散会、時に竜王山の禰気堅田川の清流に影をうつして、夕陽やうやくうすづかんとして蟬声一しきりかします。尚今寺に於いて開かれた遺品展覧会には、愛用の鏡、書像、文書等も陳列され此の薄幸なりし志士の面影を偲ばしむるものあり。一同感洞無量であつた。(終)

(昭和八年七月 記)